

## ハードとソフトのイノベーション

NHKの『歴史秘話ヒストリア』は「歴史、それは絶え間なく流れる大きな河。その中のキラキラした一滴（ひとしずく）を秘話と呼びます」で始まります。キラキラしているかどうかは別にして、歴史は無数の偶然の一滴の集合体です。

以前、歴史は事実をベースとし、事実の解釈はそれぞれの国や個人に委ねられるべきと書きました。しかし、歴史から学ぶには、連続した偶然からできた流れを解釈する必要があります。解釈するときの考え方・価値基準が歴史観、史観だと考えています。キリスト教的史観、唯物史観、ライプニッツ的史観、ヘーゲルの弁証法的史観等々、多数あります。

文明には栄枯盛衰があります。政治は政体循環史観によれば、王政、貴族政等の寡頭政から民主政に移行し、やがて衆愚制に墮することになります。21世紀にも実質上の独裁国家があり、代議員が世襲制の国家もポピュリズムの国家もあります。マルクスは最終の政治形態を共産主義としましたが、ソ連が崩壊し、民主主義が勝利したことから歴史は終わったという者もいました。現在の世界情勢を見ますと、歴史は終わったわけでもなく、また民主主義にも様々な形態、運営の巧拙等があることが理解されます。

ヘーゲルは弁証法的に進化して行くといいましたが、アラブの春、中国、ウクライナ等の現状を見るにつけ、さして進歩したようにも見えません。キリスト教の神の国は勿論、理想の民主主義も遙か遠くにあり、到達できそうもありません。人間の営みと言う面では、やはり、ニーチェの永劫回帰で歴史は繰り返しているように思えます。

さて、イノベーションですが、生起させようとするのが難しく、また、その成果を長くエンジョイするのも難しい厄介な代物と思われれます。

最近の経済のグローバル化を見ていると、確かに技術革新や生産構造などのモノの面では進歩しており、唯物論的な進歩史観に従っているように見えます。その一方で、速すぎる技術的進歩、技術伝播に加えて、激しいコストダウン競争の結果、研究開発投資すら十分に回収されないような状況に陥っているように見受けられます。

我が国は1980年代にもつくり大国になったといわれますが、その頃の米国はコストダウン目的で生産の海外移転を進め、特許など知財戦略強化に取り組むなど、グローバルなビジネスモデルづくりに取り組んでいたようです。我が国は米国の動きの真の意味を理解せず、表面だけの模倣に終始した結果、今になって、20年、30年遅れで米国の後を追っているように見受けられます。やはり、ハードと違って、ソフト(ビジネスモデル、戦略等)面で人間のやることは、実際に自ら経験し、発展の個々の段階を踏まないと次のステップに進めないものなのかと考えさせられます。イノベーションのジレンマも各国で、多くの業種で何度も繰り返されています。同じような先例が多々あるにもかかわらず、他山の石に学ぶことなく、同じ道を辿り、同じ失敗を繰り返しています。

フロントランナーになったは良いが、さてどうしたものか等と立ち止まり、悩むのではなく、謙虚に歴史や先行事例を見直せば、進むべき方向が見えてくるのではないのでしょうか。幕末・明治を明るい時代、その後を暗黒の時代とするのが司馬史観ですが、これからは自虐史観を離れて、歴史に学び、未来志向の明るい時代になって欲しいものです。